フェアトレード運動における学生の役割
――日本とアメリカでの活動を通して――

射　出　夏　子

「フェア・トレード」とは、現在の市場システムの中で不利な立場に置かれている、特に第三世界の生産者に対して、的確な対価を支払うことで成り立つとされる「公正な貿易」を意味する。さらに、長期の契約を結ぶことや生産者組合を支援することで、生産者と彼らのコミュニティの自立と持続可能な発展を促すものである。コーヒーや砂糖などの作物は、ここ数十年間大変な価格の暴落を経験し、生産者は生産コストもまかなえないような状況に追いやられた。さらに、生産量を増やすためのプランテーション化で環境破壊も引き起こされ、生態系へのダメージも著しい。こうした既存の貿易体系を見直すため、「フェア・トレード」は様々な観点からのアプローチを行なっている。

「お買い物でできる国際協力」として、「フェア・トレード」は日本でも一般市場に広まりつつある。欧米では、スーパーマーケットでもバナナ、コーヒー、紅茶などのフェア・トレード製品が手に入るほどだ。近年、「フェア・トレード」は「企業の社会的責任」の一環として注目されている。なぜなら、「フェア・トレード」は人権、女性や児童の労働、環境など、多岐にわたる問題意識を提供するので、企業にとっては格好のアピールとなるからだ。EU委員会やアメリカの上院、UNCTADなど政府レベルでも「フェア・トレード」は取り上げられるようになってきた。

筆者はアメリカで「フェア・トレード」を知り、NPOでのボランティア活動を通してこの運動に関わってきた。「フェア・トレード」は現状のシステムの不公正を改善するためのオルタナティブとなることを目指しているが、現時点では理論的にも運動としても脆い面があることは否めない。それでも何らかの前進をもたらすために、「フェア・トレード」はそれ自身が無くてはならない「問題提起」となっている。

「フェア・トレード」は、それを支持する・しないに関わらず、多くの人に知られるべきである。特に「学生」はこの運動において重要な役割を果たす。彼らは消費者としては市場の中で特殊かつ比較的自由な存在であり、運動に欠かせない労働力を無償で提供することもできる。また、「フェア・トレード」を経験した学生達が実社会へ出て行くとき、それは新たなインパクトを生み出すことが予想される。

筆者の1年半にわたる、日米のフェア・トレード団体と自ら設立に関わった学生団体での活動経験を通して　「フェア・トレード」を総括するとともに、「フェア・トレード」の歴史や理論、最新の動向を踏まえながら、本稿ではその可能性について言及する。